

【学力向上フロンティアスクール中間報告書】

都道府県名	香川県
-------	-----

学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	財田町立財田中小学校								
学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	1	1	1	1	1	1	1	7	11
児童数	19	11	16	16	18	13	2	95	

研究の概要

1. 研究主題

<p>仲間とともに作る生活に生きる算数学習</p> <p>- つまづきを生かして個に確かな力をつけるための学習指導のあり方 -</p>

2. 研究内容与方法

(1) 実施学年・教科

<ul style="list-style-type: none"> ・ 1年～6年（算数） 算数科は単元の系統性を重視する教科であり，各単元で身につけなければならない基礎・基本がはっきりしている。しかし，学習状況調査やC R T結果を見ると，4観点において個人差が大きい。そこで，単元ごとのつまづきを分析しそれに対する支援を工夫していくことで，学年の系統性を生かして児童一人一人に算数の力をつけてやれるのではないかと考えた。 ・ 3年・4年（書写） 毎週1時間の書写で，時間数は減少しているが「読み」「書き」の基礎・基本となる重要な学習である。特に毛筆の基礎指導を充実し，準備や片づけまで含めた習字を行い，児童一人一人の技能アップを図りたいと考えた。
--

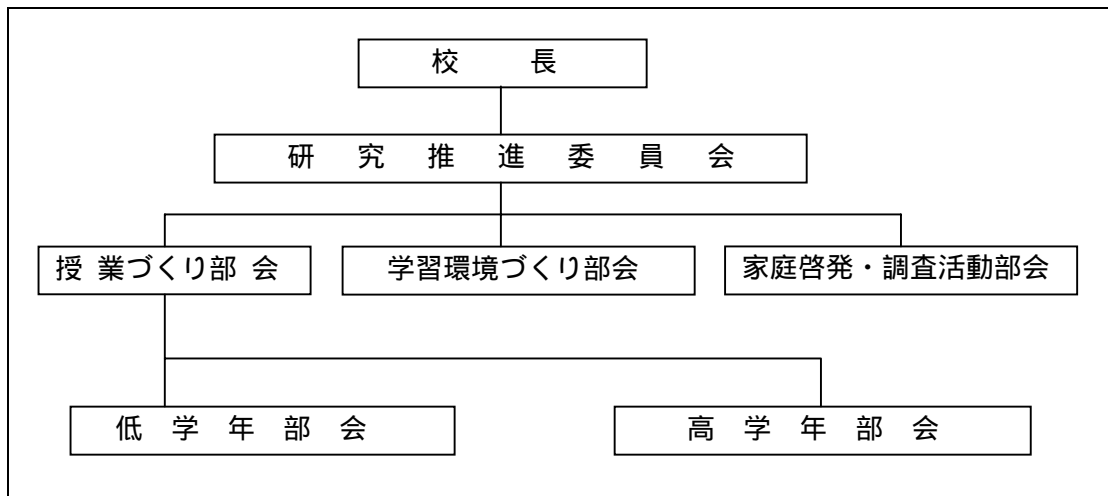
(2) 年次ごとの計画

平成15年度	<p>テーマ</p> <p>仲間とともに作る生活に生きる算数学習</p> <p>- つまづきを生かして個に確かな力をつけるための学習指導のあり方 -</p> <p>研究の見通し</p> <p>県学習状況調査およびC R T，準備テストや学習意識アンケート結果の分析をもとに本校児童のつまづきと課題を洗い出す。それをもとに単元計画や児童一人ひとりへの具体的支援を考え，習熟度別学習を推進することで確かな力をつけるとともに算数ずきな子どもを育てる。</p> <p>研究の内容・方法</p> <p>1 研究内容</p> <p>個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善</p> <p>基礎的・基本的な内容の定着</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「できた」「分かった」喜びが体感できる学習づくり ・ つまづきを克服する支援のあり方の研究推進 ・ 系統性のあるドリル学習の推進 ・ 個性を重視した絶対評価の推進 <p>少人数授業のあり方の研究</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 算数科における習熟度別学習の推進・充実 <p>学び方スキルの育成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 計画的な学習材の作成 ・ 系統性のある学び方の習得 <p>2 研究方法</p> <p>校内研修の充実による学習指導方法の充実と深化</p>
--------	---

	<ul style="list-style-type: none"> ・算数科における少人数指導のあり方の研修に努める。 ・つまずきの系統を明らかにし、その手立てを考える。 ・ドリル学習教材の充実を図る。 ・外部講師を招聘し、研修の一層の充実・深化を図る。 ・算数での学び方を他の教科に発展させる。
--	--

平成 16 年度	<p>テーマ</p> <p>仲間とともに作る生活に生きる算数学習</p> <p>- つまずきを生かして個に確かな力をつけるための学習指導のあり方 -</p> <p>研究の見通し</p> <p>15年度の取り組みの中でまとめた「つまずきと支援の記録」をもとに個のつまずきに視点をあて、教材の工夫や支援のあり方をさぐる。算数科において習熟度別学習を積極的に展開するとともに、その成果を国語科にも取り入れ、県学習状況調査において、全学年で県平均を上回るようにしたい。</p> <p>研究の内容・方法</p> <p>1 研究内容</p> <p>算数科における単元の花つまずきの分析</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各単元における「つまずきの洗い出しとそれを生かした単元計画 ・つまずきの系統性を考えたドリルプリントの作成と活用 ・「つまずきと支援の記録」の生かし方 <p>小規模校の特色を生かした少人数授業の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・算数科における習熟度別学習の推進・充実 ・教材・教具の開発と教室環境づくり <p>児童一人ひとりの定着度をとらえ、次の支援につなぐ評価のあり方</p> <ul style="list-style-type: none"> ・習熟度別学習における評価の仕方 ・定着度の評価方法 ・児童の自己評価力の育成 <p>2 研究方法</p> <p>校内研修の充実による学習指導方法の充実と深化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・算数科における少人数授業の研修に努める。 ・つまずきの系統を表に整理し、その手立てを考える。 ・つまずきの系統性を考えたドリル学習教材を工夫する。 ・外部講師（学習指導カウンセラー、算数部指導者）を招聘し、研修の一層の充実・深化を図る。 <p>授業公開と地域や外部への情報発信・情報交換</p>
----------------	---

(3) 研究推進体制



平成15年度の研究の成果及び今後の課題

1. 研究の成果

つまずきの洗い出しとそれを生かした単元計画

単元に入る前に実施する準備テスト、学習意識アンケートの結果から既習内容の理解度を見るとともに、県学習状況調査やCRTなど昨年度の本校児童のできていないところや弱いところを分析した。算数科においては、おおむね県平均・全国平均にあるものの、全体的な傾向として計算や立式の意味理解、文章題の読み取り、概数、単分量あたりでのつまずきが多かった。

学年	3年	4年	5年	6年
本校の得点	87.0	86.9	81.1	69.3
県との得点差	+6.9	+3.6	-0.2	-6.1

単元ごとにつまずきを洗い出し、それを解消するための単元計画や支援の工夫を焦点化した授業実践や授業のつまずきに対応したプリントを作成して取り組んだドリル学習（毎朝10分間 月・水・金曜 国語、火・木曜 算数）を行うことにより、各学年に応じた基礎・基本的な力や態度が身に付いてきている。本年度は定着度について、県版単元テストの平均点の目標値を掲げて取り組んできた。その結果、これまでに学習した単元のテストの総合平均点は、以下のようになっている。

学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	全校
総合平均	91.7	90.6	84.8	87.2	83.9	89.0	87.9
目標値との差	+6.7	+5.6	-0.2	+7.2	-1.1	+4.0	+3.7

また、「つまずきと支援の記録」をファイル化し、情報交換にも役立てた。

少人数授業の取り組み

児童一人ひとりに確かな力をつけるため、「基礎コース」と「発展コース」を設定し、多目的室、児童会室の環境整備を行い、2つの教室を利用して習熟度別学習を積極的に実践した。コース選択については、教師がそれぞれのコースのねらいや進め方を説明した後、準備テストで理解度を自己診断するとともに、アンケートを併用して教師が助言しながら児童が選択するようにした。こうしたコース学習を継続することにより、初めは自分の力に合ったコースが選べていなかった子ども、しだいに適切にコース選択できるようになった。

[平成15年 10月20日 6年「分数のかけ算・わり算(2)」の授業風景]



基礎コース（計算マスターコース）

計算マスタープリントにチャレンジするAさんと約分わすれを指導する少人数指導担当

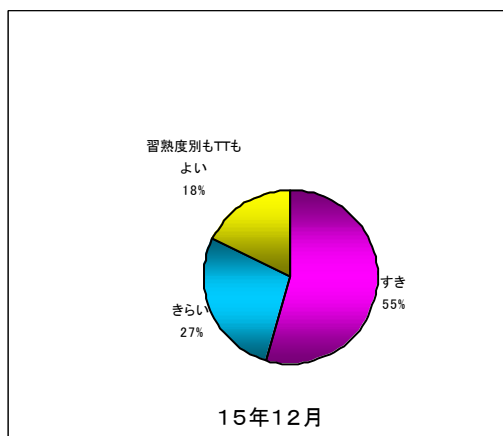
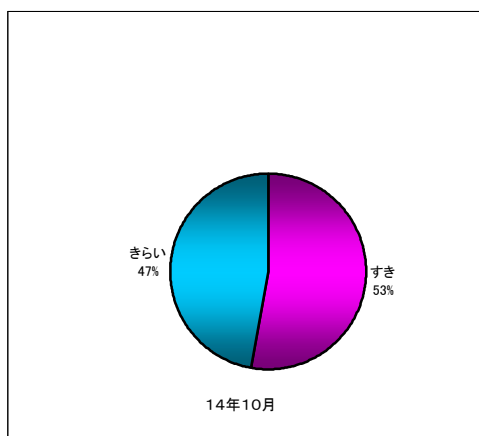
発展コース（文章題マスターコース）

既習のかけ算わり算の文章問題をつくり、みんなに考え方を発表するBさん



また，児童アンケート（H14年10月全校生86名H15年12月全校生96名）の結果は

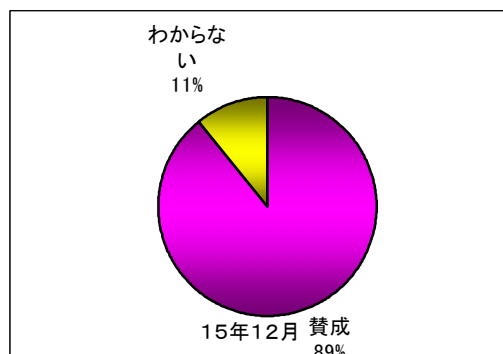
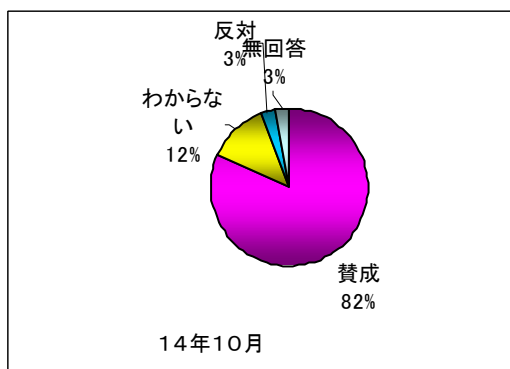
< 習熟度別グループの2つに分かれて学習することについてはどう思うか。 >



上のデータや記述意見を見ると、「難しくてもわかりやすく教えてくれる」「2人の先生で学習するのが楽しい」「具体物を使って教えてくれるのでよくわかる」などコース学習により，算数への興味・関心が高まったり，学習がわかりやすくなったりしていることがわかる。さらに，すきが増え，きらいが20%も減少していることから，児童は習熟度別学習を肯定的に受け止めていると言える。

保護者アンケート（H14年10月回答者76名 H15年12月回答者92名）では，以下のような結果が出ている。

< 少人数指導での学習を見てどう思いますか。 >



< 少人数学習はどのように進めるのが望ましいですか。

(複数回答) >

教師2人で1つの学級を指導するティームティーチングがよい

グループ分けは同じ様なグループに分けるのがよい

グループ分けは習熟度のグループに分けるのがよい

少人数指導での学習は算数以外の教科にも広げるとよい

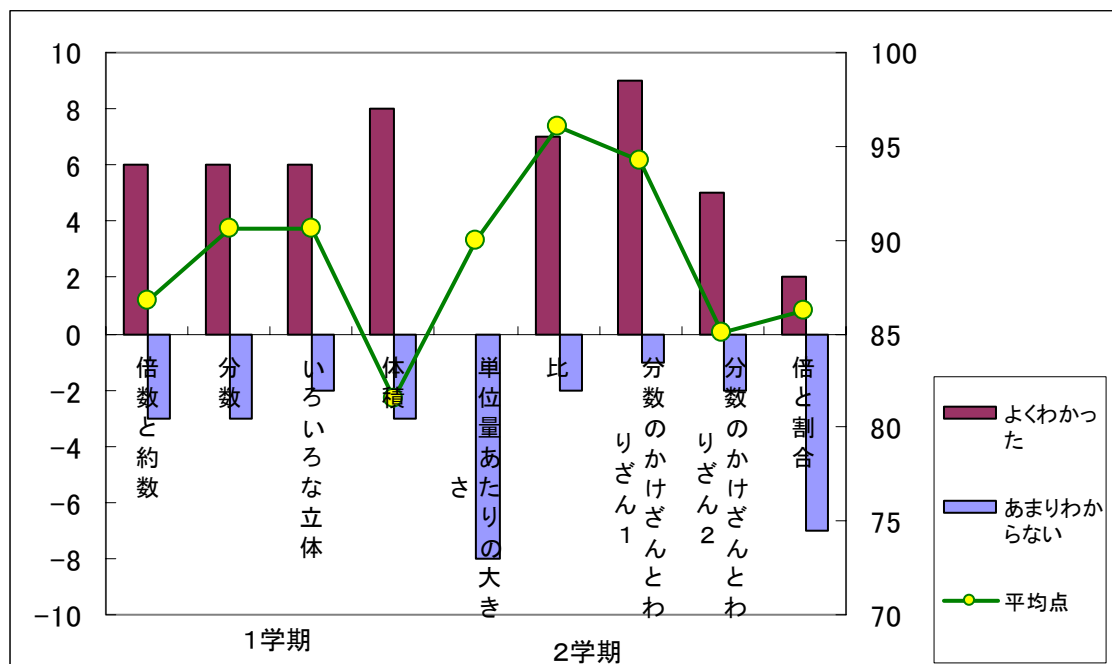
	H14年10月	H15年12月
教師2人で1つの学級を指導するティームティーチングがよい	51.3%	45.6%
グループ分けは同じ様なグループに分けるのがよい	18.4	15.9
グループ分けは習熟度のグループに分けるのがよい	34.2	41.5
少人数指導での学習は算数以外の教科にも広げるとよい	63.2	48.9

本年度の授業参観により少人数授業賛成の割合が増え，反対意見はなくなった。習熟度別学習を希望する意見は7%アップしており，昨年度以上の理解が得られた。記述意見では学習内容の理解，丁寧な指導，発表意欲，落ち着いて学習などの学習効果が保護者の目に多く映ったようである。

定着度の評価方法

全学年とも、学期ごとに単元テストの平均点と「ふり返りアンケート」の関連性をさぐり、グラフ化した。児童の理解度をアンケートと平均点を重ねてみることで、教師は支援のあり方を反省し、次の指導へと生かした。また、「ふり返りカード」を学年に応じて随時使用することにより、自分の学習態度や算数の力を自覚できる子が増え、友だちのがんばりやよさにも目が向きだした。さらに、この自己評価を加味してより多面的なとらえ方ができるようになった。

< 6年 1・2学期単元テストとふり返りアンケートの関連性をさぐる >



学習指導カウンセラー，算数部の指導者をお迎えしての研修の充実

学習指導カウンセラー事業の指定を受け、年間20時間、香川大学教授の長谷川順一先生をお招きして校内研修を実施した。県学習状況調査の分析から算数科のねらいや本質，単元計画や教材開発の工夫，少人数授業の支援と評価等について指導をいただいた。その指導をもとに研究授業を行い，参観と討議会の後で，長谷川先生から指導・講評を受けるというステップで実践してきた。また，学期に1回ずつ地区算数部の指導者を迎えての研修も実施した。

これらの貴重な訪問指導を受けて授業研究はもちろんのこと，校内研修の方向性や研究テーマ分析，研究仮説等についてもご示唆をいただき，全職員で見直すことができた。

2. 今後の課題

単元ごとのつまずきの実態把握を生かした単元構想

つまずきの系統性を考えたドリルプリントの作成と活用

小規模校における少人数授業のあり方

児童一人ひとりの定着度をとらえ，次の支援につなぐ評価のあり方

学力等把握のための学校としての取組

- ・標準学力テスト（年1回 2月）
- ・県学習状況調査（年1回）
- ・県版単元テスト（単元終了後 学期4枚程度）
- ・本校担任作成による月末漢字・計算テスト（年11回 毎月末）
- ・単元指導中および指導後のふり返しテストおよびドリルプリント等
- ・少人数指導についての児童・保護者・教員のアンケート調査（年間2回10月2月）
- ・全校児童対象算数授業ふり返しアンケート（年3回 学期末）

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

- ・ 6月20日 第1回地区協議会で本校の取り組みについて発表
- ・ 8月28日 財田町教育研究会上中小交流会で本校の本事業への計画や1学期の実践を発表
- ・ 11月13日 三観地区算数部研修会を本校で開き、習熟度別少人数授業を実施
本校の取り組みについても提案
- ・ 12月 6日 三観地区第3区の同学年研究会で本校の取り組みを発表
- ・ 12月26日 第2回地区協議会で本校の研究実践計画の概要や取り組みの中間発表
- ・ 2月20日 三観地区小学校教頭会で本年度の取り組みを発表

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

- | | | | | |
|----------------------|----------------------------|-------------------|------------|----------|
| 【新規校・継続校】 | 15年度からの新規校 | 14年度からの継続校 | | |
| 【学校規模】 | 6学級以下
13～18学級
25学級以上 | 7～12学級
19～24学級 | | |
| 【指導体制】 | 少人数指導
一部教科担任制 | T・Tによる指導
その他 | | |
| 【研究教科】 | 国語
生活
体育 | 社会
音楽
その他 | 算数
図画工作 | 理科
家庭 |
| 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 | | | 有 | 無 |